



Title	日常場面での自閉症児の特徴に関する報告
Author(s)	青山, 真奈美
Description	研究ノート
Citation	北海道大学医療技術短期大学部紀要, 8, 97-104
Issue Date	1995-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37582
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_97-104.pdf



日常場面での自閉症児の特徴に関する報告

青山真奈美

A Report on Behavioral Characteristics of Autistic Children at Their Daily Life

Manami Aoyama

Abstract

Few autistic children are able to go to nursery school or kindergarten as their behavioral problems disturb to adapt themselves well to group activity. I got an opportunity to observe their daily life and developing process at nurturing and in a class of group therapy.

At that time, I found that we had to pay attention deeply to their behavior and gain an insight into their hidden motivation.

In this report, I described their complicated special behavioral characteristics and tried to explain why they behaved in that way, making reference to two writings written by autistic people themselves.

This report would make it possible to obtain correct understanding of the mind of autistic children.

要 旨

自閉症児にみられる種々の特徴は、彼らの集団内での適応を妨げ、一般の幼稚園や保育園における受け入れを難しくさせている。この度、精神薄弱児通園施設での自閉症児の日常保育および、外来部門での集団療法に参加する機会を得た。そこでは、様々な彼らのありのままの姿に触れ、また彼らの発達する姿を見ることができた。彼らの行動は一見すると非常に複雑で特異的である。彼らを理解するには、ひとつひとつ

つの行動に注意を払い、その意味を洞察することが必要であることを認識した。そこで、本報告では自閉症者本人による手記を参考にしながら、彼らの行動と半年間に見られた変化を記述し、彼らを理解する一助としたい。

I はじめに

この度、札幌市内にある精神薄弱児通園施設のご厚意により、1994年10月から約半年間、自閉症児の保育場面と集団療法の場面を通じて、彼らと接する機会に恵まれた。ダウン症児や単

純精神遅滞児は、一般の幼稚園や保育園での受け入れが比較的よいのに対して、自閉症児の受け入れはなかなか難しい。それは、自閉症児がもっている様々な行動面での特徴が、彼らの集団内での適応を難しくさせているという現実を反映している。本稿では、自閉症児の通園による日常保育場面におけるこどもたちの行動特徴と、約半年間の集団療法における変化について記述報告する。

施設では、自閉症児とともに遊ぶことを通して、彼らのいろいろな「やり方」に触れた。彼らのすることは、一見するととても奇異に感じたり、理解に苦むような行動をしているように見える。しかし、そのしぐさを注意深く見ていると、彼らには彼らだけにわかる世界の特別な解釈の仕方が存在しているようであり、単に私達がその法則に気づくことができないだけなのではないか、と考えるようになった。しかし、彼ら自身が、その一瞬一瞬に何を思っているのかを確かめるべき術はない。従って、こどもたちの一挙手一投足に注意を払い、洞察することが彼らを理解するためのより有効な方法だと再認識した。

本報告の目的は、こどもたちの姿をありのままに受け止めて、彼らへの理解を深める一助とすることである。ここでは、彼らが何を思っているのかを知るためのひとつの手がかりとして、自閉症者本人による記録を参照する。そのひとつは、テンブル・グランディン「我、自閉症に生まれて」(1994)であり、もうひとつはドナ・ウィリアムズ「自閉症だったわたしへ」(1993)である。

II 日常場面での自閉症児の特徴

1 自閉症について

自閉症の研究は1943年、Leo Kanner¹⁾の11例の小児の報告から始まった。Kanner(1964)によれば、これらの小児は生後間もない頃から周囲の人や状況に対して、普通、こどもがするよ

うな方法では自己を関係づけることができないと言う。生後1年で既に逃避的傾向を示したこれらの症例に対して Kanner は早期幼児自閉症(early infantile autism)と名付けた。

その後、研究が重ねられ、自閉症に対する考え方は少しずつ変化してきている。発達の側面から自閉症を診断している WHO の用語定義案²⁾によれば、おそくとも生後30カ月以内に症状が認められる症候群である、聴覚視覚刺激に対する反応が異常である、言語発達の遅れ、反響言語、代名詞反転、未熟な文法的構文、抽象語を用いることの困難、言語的ならびにゼスチュアによる話し言葉を社会的に用いる能力が障害される、視線を合わせない、共同遊びをしないなどの社会的関係樹立の障害、儀式的行動、変化に対する抵抗、妙な物体に対する愛着や遊びの常同的パターン、抽象的または象徴的思考の能力や想像的な遊びの能力の減退、知能は著しい低格から正常以上まで個人差が著しい、丸暗記や視覚空間的技能を要する課題においてまざっている等と示されている。

実際には、これらの症状は個々によってその現れ方は様々であり、大きく広汎性発達障害として捉えられる場合もある。

2 こどもたちの様子と自閉症者本人のことば

ここでは、通園クラスの保育場面の中で見られた、自閉症児たちの種々の特徴について、自閉症者本人の手記による記述を参照しながら述べていく。

当施設は通園施設であるので、対象は学齢前のこどもたちだった。こどもたちの大半が、言語による表出がみられず発声のみだったり、自分が気に入っている数語のことばだけを繰り返すといった状況だった。こちらからの話しかけに対しての言語的反応は少なく著明なオーム返しはみられなかった。

ドナは、このオーム返しについて次のように書いている。

一心を飛び立たせていろいろな物に同化するの
があまりに楽しくて、ことばを理解するなど
という平面的な行為には、とても興味が向かなか
った。「一体おまえは何をしてるの？」いらだた
しげな声をする。とうとうこれは何か言わな
くてはならないと感じて、わたしは妥協するこ
とにする。そして誰に言うともなく、耳に入っ
てきたばかりのことばをそのまま口に出す。「一
体おまえは何をしてるの？」³⁾—

強迫症状やこだわりは頻繁に目にした。Aく
んは、一日の園での日課をよく覚えておりひと
つのプログラムが終了しそうになると一目散に
次のプログラムの場所へ移動していく。季節の
行事などで特別にその日の予定が変更になっ
ている場合には、パニックを起こし自分の予想
通りでなかったことに大きい声を出して抗議す
る。また、部屋のこちらの壁からむこうの壁へ
とバタバタと走ってどしんと体当たりするよう
な行動もよくみられた。

テンブルはこだわりに関して次のように書い
ている。

—自閉症的な児童が持っている多くのこだわり
は、超活動的な神経組織の興奮を、減退させる
必要性和かかわっているのである。こだわりに
集中することによって、彼らが対応できない他
の刺激をブロックするのである。・・・あまりに
もたくさんのセラピストや心理専門家が、もし
自閉症児がこだわりに耽溺することを放置され
ると、取り返しのつかない害を受けると信じて
いる。どのケースもそうではないと、私は確信
している。こだわりは特性の極端なものにしか
すぎない。⁴⁾—

さらに、自閉症児ではときおり、自傷行為が
みられることがある。外来集団療法にきている
Bちゃんの母親はある時こどもの行動をこう語
った。

「指先をかじり出して、かじってかじって、指
先から血がたらたらと出てきたのにちっともや
めようとしなくて続けているんです・・・。」

自傷行為についてはテンブルがこう書してい
る。

—幼かった頃、私は痛みを招く刺激を少し好ん
だことを覚えている。だから、子どもたちが自
傷的になるのは、たぶん、これが原因ではない
だろうか？⁵⁾—

ある物について固執するという特徴もよく目
にした。Cくんは電気のスイッチにこだわり登
園してくるとすぐに、電気のスイッチを消して
しまう。ホールに出て部屋に戻ってきたときな
どもまず、電気のスイッチを触ろうとする。他
の部屋に行っても目敏くスイッチを見つけて消
して歩いている。Dくんは「とまれ」の赤い道
路標識が好きで外に散歩に出るといち早く赤い
三角の「とまれ」を見つけてはその下まで走っ
て行って指をさして見上げている。外来集団療
法に通ってきていたEくんは、ドアや階段の踊
り場にある緑色の「非常口」のライトが好きだ
った。

また、自閉症児は物を意識しても、それを所
有している人には注目しないという現象も体験
した。Fくんは、私がかけているめがねに興味
を示し、普段は他人に抱っこされることを嫌が
るのだが、顔からめがねを取ろうとして夢中
になり抱きついてきたことがある。めがねは
ずしてしまっても、目の周りを触って、あたかも
まだめがねがそこにあるかのように皮膚をつか
んで引っ張ろうとしていた。

ドナは次のように語っている。

—わたしの場合、ある人が好きだということは、
その人の物が好きだということなのだった。⁶⁾—

しかし、今のFくんのような場合は興味の対
象が、たまたま人の顔に附属したものであった
という点では彼の興味を物から人へ、人の顔や
視線へと移しやすい状況にあったと考えられる。
自閉症児が、自分の世界から私達の世界につな
がるきっかけを見つけだすのは、意外と偶然の
成りゆきであったりするようだ。したがって、
このような、めがねを手にとろうとして、たま

たま見た視野の中に偶然にも人間の笑っている顔があったり、視線を受けとめたりするような状況をセラピストたちは積極的に作ったり利用しようとしている。

また、彼らは自分の感情に時にとらわれたり、うまくコントロールできずにいることが見受けられた。Gくんは、母親に叱られていったん機嫌を悪くすると、なかなかそこから立ち直ることができずに、ずいぶんと長いこと泣き続けていることがある。保母や母親がなんとかして気を紛らわそうと好きな物を見せたり誘っても、いったんはふと気をとられそうになるが、すぐに元の不機嫌な自分に戻っていく。その様子を見ていると、時間が経過してくると、自分でもなぜ不機嫌なのかわからなくなっているかのように見えた。

ある種の感覚刺激を非常に好むことも見受けられた。Gくんは精神科医の診察の間、回転する丸椅子に腰掛けていつまでもそこで回り続けていた。

テンブルはこう言っている。
一くるくる回しも私の好きな行為だった。床に座って自分でくるくる回ったものだ。そうすると部屋も私と一緒に回った。この自己刺激的行為は、周囲を自分でコントロールしているようなパワーを感じさせた。⁷⁾—

ドナはこう書いている。
一公園には、わたしの一番お気に入りの樹もあった。わたしはその樹の下に行くと・・・枝に両方の膝を引っかけてさかさまにぶらさがる。そうして、さかさまのまま、歌を歌ったりハミングしたりしながら体を揺らすのだ。まわり中が一定のリズムで動いている限り、わたしは幸せなのだった。⁸⁾—

Ⅲ 集団療法でのこどもたちの変化

ここでは、外来部門の集団療法に通ってきていた自閉症児たちの、約半年間の発達過程を追って記述する。

1. 集団療法の概要

約半年の間、週一回行われている学齢期前の自閉症児を対象にした集団療法に参加しながら、時間経過のなかでこどもたちがどのように変化していくのかを見ていくことができた。その中でも集団療法開始時からクラスが解体になるまでの全期間を通いつづけたBちゃん(2歳女児)、Eくん(4歳男児)、Iちゃん(2歳女児)の3人の様子を中心に述べる。

集団療法に参加しているメンバーは、こども(4～8人)とその母親、保母1名、臨床心理士2名、精神科医1名である。所要時間は約1時間。内容としては、人を意識させることを目的とした遊びと手遊びやリトミックなどをいくつか組み合わせて行っていた。

2. こどもたちの変化

1) 前半期

こどもたちは、まだ場に慣れていず不安があるようであった。Iちゃんは、教室に入ってくる前から泣いており、始まって母親の後で突っ伏して泣くばかりだった。その日のプログラムも半分くらいすすんだところで、やっと泣きながら遊びに入ってきた。

Bちゃんはほとんど保母らがすることには興味を示さず、教室内の棚にしまっておもちゃや窓の外やオルガンなど次々と歩き回っていた。名前を呼ばれてもはっきりした反応は得られにくく、視線も合いにくい。Yくん(4歳男児)とEくんは比較的遊びには乗りやすく自分から参加しようとする意志もみられる。

回を重ねるごとに、少しずつ集団に流れとまとまりが出てきた。4回目までは必ず1度は泣いていたIちゃんは、自分から教室に入ってきて帰るまで泣かずに過ごせるようになってきた。むしろ帰るときに「もっと遊んでいきたい」というふうに泣きだすことがあった。

Bちゃんは相変わらず動転性の行動が続いていたが、シーツの両端をおとなが持って、その

真ん中にこどもを乗せてぶらんこのようにゆらゆら揺するシートぶらんこは気に入っているようで、揺れにじっと身を任せていた。感覚的な遊びは好むようだった。Yくんは、先が見通せるようになってきて、最後の「お帰りの会」では、自分から先に保母が使う指人形を手につけて「さよなら」をする真似をしたりしていた。Eくんは、シートぶらんこが嫌いらしく大声を出して抵抗して、それから後はずっと機嫌が悪かった。Eくんのこのような行動について、後に母親が、あんなふうに声に出して自分の意志を表現しようとしたのは初めてのことだったと話してくれた。これはEくんがある事態に対する自分の気持ちの表し方を知ったことの現れだったのではないかと思われた。まだ、はっきりした言語にはなっていないが、これ以降、Eくんはよく母親や周囲のおとなに向かって何かを訴えることが多くなってきていた。

臨床心理士は、このようなこどもたちの変化について次のように説明している。「こどもにとって次に何が行なわれるかが理解できてきたこと、自分の周囲にいる人（大人もこどもも）が自分に緊張を与えるものではないことが分かってきたことなどが、不安の除去という当面の課題をクリアしたのだろう。」

2ヶ月目ぐらいに入ったところで新人のKくんが入ってきた。先天性の病気で脳の手術をうけた後の発達遅滞で言語表出がなく、時々いやなことがあると耳塞ぎをしたりするところから自閉傾向があるとのことだった。以前からのメンバーがだいぶ落ち着いてきていたので新人のKくんとの差は一目瞭然だった。Kくんは集団になかなか入ることができず、室内を動き回り他者からの邪魔に合うと耳塞ぎをしながら大泣きしていた。大人が働き掛けることでやっと泣きながらも積み木を積みに行ったり玉入れをしていた。Kくんのこのような様子を見ていると、障害児だからというよりも、経験不足によって他人との関わり方がわからない、集団に慣れて

いないという印象を強く受けた。

Bちゃんは父親が入院したことにより、家庭内の環境が変化していた。Bちゃんは、自傷行為がみられたり、物を何でも口に持っていったりなめるという現象がみられたりしていた。これらの行動が、一層母親のストレスと疲労を助長していた。あとから振り返ると、この時期はBちゃんも母親も最も辛い時期だったと思われる。臨床心理士の判断で集団療法とあわせて個別療法の回数が増やされた。

その後、新人が4人程加わり、Yくんは別の集団療法のクラスに移っていった。メンバーが増えてクラスはその後にも継続されていった。

2) 後半期

集団療法では、遊びにトランポリンや新聞紙ちぎりやスカイバルーンといった新しいメニューを取り入れていた。Eくんは、久しぶりに会った私を見て、あたかも自分の記憶の中をじっくりと探しているかのように、しばらく私の顔を見つめていた。この頃から、集団療法に来ると気に入ったスタッフを探して手をつなぎにきたり、膝の上に座ったりするようになった。相手がピアノを弾くなどして一緒に遊べないとわかると、「こっちに来て」というように大きい声で訴えたりすることがあった。相変わらず、新しい遊びには抵抗を示していた。しかし、最後のクールで行った、スカイバルーンという七色の大きいパラシュートのようなシートをふわりと宙に舞わせる遊びのときは、抵抗するような声を出しながらも、シートの行方を少し笑顔で浮かべながら目で追っていた。鮮やかな原色の天井一面ほどもある大きなパラシュートが、ふわりと舞って、全員の頭の上一面を覆ったあとで、すーっと床に滑り落ちる様子と、その時にパラシュートの動きで巻き起こる暖かいゆるやかな風が、いかにも心地よい感じだった。原色と柔らかな風による刺激は、私自身にとっても魅惑的に感じられた。だから、Eくんのみな

らず、どの子どもこのスカイバルーンの美しさにうっとりとした気持ちは理解できるような気がした。最後に片づける時に「Eくんもここを持って一緒に片づけて。」と誘うと嫌がらずに笑いながら手伝ってくれていた。

Bちゃんは、かなりはっきりとした変化がみてとれた。一時期の親子ともにストレスの高い状況からは脱出していた。人に対しても物に対しても、じっと見つめるしぐさが増えていた。以前とは違い、はっきりとした興味をもっているようなしぐさに変わってきていた。また、笑顔が増えていた。ある日の集団療法の始まりで「Bちゃん、こんにちわ。」と声をかけると、一瞬の間があってからBちゃんは、しっかりと私を見返しながらククッと声を出して笑った。また、手遊びのときなども嬉しそうに見つめながら動作模倣が増えてきていた。

笑うということについてドナはこう書いている。
一人はよく、わたしの目の前でそうやって笑い出したものだ。そして皆、あなたのことを笑っているのではなくて、あなたと一緒に笑っているのだ、と言ったものだ。だが、私自身は笑っていなかった。だから、わたしは相手の真似をして、笑うようにした。そうすれば、本当に彼らの言っているとおりになる。わたしのぎこちない笑い方に、彼らはまた笑う。一緒にわたしも笑う。すると皆はわたしも楽しんでいるのだと思い、わたしのことを楽しい人間だと思うのだ。ここから、学んだものは、後にわたしの人生においておおいに役立つこととなる。わたしは、自分の行動が人の次の行動のきっかけを作り、それによって自分もその場に入っていけると知ったのだ。つまり、演技することを覚えたのだ⁹⁾—

彼らにとっては、笑うことは必ずしも楽しさの現れではないとしても、ドナが言うように、そうすることでその場に入っていくきっかけができれば、彼らと周囲との関係も変わっていく

のではないだろうか。また、ドナのことばの中には、こどもが、笑うという現象の社会的な意味をどのように知っていくのかが、示唆されているのではないだろうか。おそらく、人はこのような経過を経て、情緒や感情表現といったものを学んでいくのだと思う。

Iちゃんは、リトミックをしているときなど、自分も動きながら大人の動きを目で追いかけていることがあった。また、一度機嫌を悪くしても好きな遊びに入ると、すぐに立ち直ることができるようになっていた。Iちゃんもスカイバルーンの視覚的な刺激が好きなのか、バルーンをテントのようにしてその中に入ると、とても喜んでその中でシートの七色を見上げながら歩き回ってはしゃいでいた。

IV 考 察

1. 遊ぶということ

集団療法における遊びは、おとなにとっては、ある目的を持った「課題」ではあるが、彼らにとっては遊びとして受け入れられなければならないという点に難しさがある。特に人を意識させるような内容の遊びという点では、スカイバルーンのような遊びは、自分の快い感覚の中にだけひたりがちになるため、こどもの喜びは大きいと設定の目的からすると、疑問が残る。が、こどもが集団療法の場に来て、ひとつでも楽しいとか、気持ちがよいといったような体験をしていくことを重視する考え方もあれば、そこからもっと踏み込んで対人関係にひきつけた内容を重視する考え方もある。私自身は、これまで述べてきたような自閉症児の特徴～自分が気持ちよいと感じるものは受け入れやすい、好きなことには固執するだけにそのことには興味も抱いている～というような特徴を考えると、こども自身がどう感じているかが、すべてを受け入れる前提になるだろうと思う。

遊びということについて野村ら(1987¹⁰⁾)は、自閉症児に対するプレイセラピーの観点から次

のように述べている。

「こどもにとっての遊びは、遊びを通しての体験によって新しい状況が作られるということに意味がある。大切なことはセラピストがそのこどもにどういう遊びの場面を用意すれば治療を受けたことになるかということである。・・・プレイセラピーにおける治療を考える場合、基本として人とふれ合うことによってこどもが育っていくという面を重視すべきである。遊びの中に人間的な活動がたくさん生じてくることによってはじめてよくなっていく、変わっていくのである。」

2. こどもたちの変化について

集団療法の半年間でこどもたちにはいろいろな変化が見られた。Iちゃんの母親は、最後の集団療法の日に「うちで、両手をほったに当てたり、げんこつをとんとんさせたりしている時があった。それは、ここでやった手遊びを真似しているのだとわかり、楽しいと思ったことは忘れないんだなあと思いました。」と話してくれた。BちゃんもEくんもおとなの目から見ると、良い方向に向いていると思われる変化があった。

しかし、これらの変化がなぜ起こったのかを単一の原因に帰属させることはできない。集団療法の効果であったのか、あるいは、始めからそのような発達の経過を辿るべき力を持ったこどもたちだったのかもしれない。あるいは、集団療法に来ていた母親が自ら勉強をして、自宅で良かれと思うやり方を実践していたためだったのかもしれない。実際には、考え得るすべてのことが総合された結果が、こどもたちの姿なのだと思う。こどもたちは、障害を持っているかもしれないが、一刻一刻発達している。彼らの発達曲線に集団療法のなかでの関わりがどのように影響を及ぼしたのかを正確に知る手段はなく、もちろん集団療法をしなければどうなったのかを知ることもできない。このようなこど

もたちを理解するには、彼らと自分との人間関係の中で見られる変化を見逃さずに気づくことが不可欠である。そして、あたりまえのことだが、彼らが「発達している」という紛れもない事実を目の当たりにできたことは、大きな収穫だったと思う。

また、こどもたちと接する中では自分がどう行動すればよいのか戸惑うこともあった。そんな時、臨床心理士は、「普段の自分らしく振る舞う」ように助言してくれた。また、当施設は集団療法や通園クラスに、学生やボランティアなどが入ることを快く受け入れていた。それは、いろいろな人たちが入ってくる状況それ自体が、こどもたちの体験を増やしたり、こどもたちの違った側面を観察するよい場面にもなるからだという考えによるものだった。このような臨床心理士の指導や施設の態勢の中には、ひとりの人間の存在そのものをこどもに対する「教材」として使おうとする、積極的な姿勢がうかがえた。野村ら(1987¹⁰⁾)は、治療能力とは技術的な学習より、セラピスト固有の人格的レベルの条件が働いているのだと述べている。私自身がどのように振る舞うべきなのかというマニュアルはない。その意味では、彼らが何をどう捉えているのかを考えると同時に、その時自分はどうか感じたのかを意識することも重要なのではないだろうか。

V おわりに

この度、こどもたちと接し、また、こどもたちに携わる人たちから、色々な場面を通じて意見を伺うことができた。この体験を通して、自閉症児の持っている特徴をありのままに見つめ、そうした振る舞いをするこどもたちの内面にある必然性を洞察することが、彼らとつき合っていくための手がかりとなることを認識した。これに加えて、障害を持って生きるということの重さについて改めて考えることにもなった。障害を持った者が、その障害ゆえに、特別な教育

(特殊教育とか療育などと呼ばれる)を受けなければならないということには、少なからず疑問を抱いた。一方で、彼らの持っている問題を単に「個人差」だと言って片づけてしまうことは乱暴すぎるだろう。

しかし、彼らを受け止める意識の奥底に、彼らに対する何らかの逸脱感を持ってしまっていることを私自身は否定しきれなかった。むしろ、このことに対して変化を求める必要があるのだと感じている。特別な教育をされるべきは、知らず知らずに、このような意識を持ってしまう私たちだったのではないか、今後も考え続けていきたい。

謝 辞

文末になりましたが、社会福祉法人「楡の会」の臨床心理士をはじめ職員の方々、そして我慢強くおつき合くださったこどもたちとお母さん達に心より深謝いたします。

引 用 文 献

- 1) L. Kanner, 黒丸正四郎他訳 (1979)「カナー児童精神医学」医学書院
- 2) 牧田清志 (1969)「児童精神医学」岩崎学術出版社
- 3) Williams, D. (1992) Nobody Nowhere.
Japan UNI Agency Inc., Tokyo. 河野万里子訳 (1993) 自閉症だったわたしへ. 新潮社, pp 20
- 4) Grandin, T. and Scariano, M. T. (1986)
Emergence : Labeled Autistic. Arena Press., USA. カニングハム久子訳 (1994) 我, 自閉症に生まれて. 学習研究社. pp 145-146
- 5) Grandin, T. and Scariano, M. T. 前掲書 pp 146
- 6) Williams, D. 前掲書 pp 22
- 7) Grandin, T. and Scariano, M. T. 前掲書 pp 30
- 8) Williams, D. 前掲書 pp 34
- 9) Williams, D. 前掲書 pp 35-36
- 10) (1987) 野村東助 (編): 講座発達障害—自閉症—, 日本文化科学社, pp 66

11) (1987) 野村東助 (編): 前掲書